



# 読書歌壇

# 読書俳壇

新たに選者に就任する高野ムツオさんは1947年、宮城県生まれ。阿部みどり女、李卓夫の指導を経て、宮城県塩釜市に居を定め、現代俳句の巨人佐藤虎房に師事しました。2002年に虎房の主宰する「小熊座」を継承し、主宰を務めています。

現在は、宮城県多賀城市に在住。東北の風土と人間の精神性を感じさせる大きな俳句で、俳壇から高い評価を受けています。句集に『雲雀の血』『鶴の王』など。東日本震災の衝撃を受け止めた作品などを収めた句集『萬の翅』は2014年、読売文学賞と蛇笏賞を受けました。

現代俳句協会副会長のほ

## 新選者に高野ムツオさん



高野ムツオさん(9月30日、大坂府和田市で) 吉野拓也撮影

\* 高野ムツオさんの代表作  
 われは粗製濫造世代多きはり  
 万の翅 見えて来るなり虫の闇  
 四肢へ地 震きたる 轟轟と轟轟と  
 膨れたい 捲れ 捲れ 天津波  
 芽吹くとは血を噴くことか 陸奥は

## 宇多喜代子さん 来月で選者退任

1996年6月から30年近く「読売俳壇」の選者を務めてきた宇多喜代子さん(88)の退任は12月で終わります。来年1月の紙面から、新たに高野ムツオさんが担当します。宇多さん宛ての投稿は11月30日(必着)で締め切り、きょう14日から高野さん宛ての投稿を受け付けます。選者を終えるにあたり、宇多さんがこれまでを振り返りながら、現在の思いを語りました。

10代で俳句を始めました。父の転勤で生まれ故郷の山口県徳山市(現周南市)から大阪府豊中市に移り、高3で年生の時に漢口芝罘さんが主宰の古い結社に入りました。初めは全くの趣味でした。30代半ばは桂昌亭に出会います。季節や定型にこだわらない新興俳句を知り、こんな世界があるのかと彼女が主宰する「草苑」に入りました。

新興俳句への理解を深めながら、季語の大車も身にしみます。歳時記を知るにつれ、根幹は農業だと思ひ、丹後で田舎作りを体験したり、解作の源流を訪ねて中国・雲南省を旅したりしました。

雲南省では、ここは日本

## 異なる作品 刺激に

の原風景だと思いました。あちらの農民の手を握ってよく分かった。ふわふわしてはなくて、きりりとしている。ああ、機械立町が入る前、江戸時代の日本人もたらしたんだろう。梅雨があつて日照があつて。四季のある日本は創作に本当に向いた国です。この国にふさわしい植物を見つけて定着させた先人たちは知恵がありましたね。

うた・きよこ 1935年生まれ。2001年句集『夢』で蛇笏賞、12年に『記憶』で詩歌文藝賞。著書に、戦時下の俳人たちについて記した『ひとたば』の手紙から『な。文化功労者、現代俳句協会特別顧問。



「読売俳壇」選者を今年で終える宇多喜代子さん(9月30日、大坂府和田市で) 吉野拓也撮影

これから日本も何が起るか分からなければ、飢えずに暮らすためにも創作を減らさないことが大事です。

作家の中上健次さんと出会うと和歌山県新宮市の公開講座「熊野文学」に俳句を教えに通じたこともあり、短気な私です。でも不思議に私の言うことは聞いてくれるんです。そうやって信頼関係ができていきました。そこは半島。本体から大きく突き出ている、海からの渡来者もある。信仰の地でもあり、独特な世界を感じて、『半島』という句集ができました。

あちこち動き回りましたが、何が原動力か、好奇心です。面白そうだと思つてどうしていられない。でも自分で出来る範囲の行動や冒険はしない。そして、そこに行く必要もあるんです。

日本は四季があつて周辺に変化がある。短くて季語と定型があるから俳句は作りやすい。俳壇という、愛好する人たちの表現の場は必要だと思ひます。

選は全く苦勞はありませんでした。毎週違う作品が寄せられ、季節が変われば句もまた変わる。常連もいれば新しい投稿者も現れて面白かった。私の苦しい時事的な話題をうまく俳句に作つてこられて刺激にもなりました。

天災も多く、自然は時に怖いことがあります。でもその中をくぐり抜けて私たちが古来生きてきた。だから季語はなくなり、俳句の愛好者がなくなることもないと思います。(談)

## 交流楽しみに

宇多喜代子さんのあとを継いで当欄の選者に就くことになりました。懸念は恥ずかしくもありませんが、私の残りの時間の許す限り、全力を尽くして選に当たりたいと心を燃やしています。

日本は多様に変化に富んだ自然や文化、そして歴史を育んできた国です。成田千空さん以来の東北在住の俳壇選者として、その視線を生かしながら各地の今を生きてる人々の俳句と向き合つていきたいと思います。全国の投稿者や愛読者の皆さんと豊かな心の交流ができることを楽しみにしています。